

# ポットを介したイチゴ萎黄病の伝染と防除対策

佐賀県農業技術防除センター <sup>いな</sup>稲 <sup>だ</sup>田 <sup>みのる</sup>穂

## 取組のきっかけ

2011年6月に県内のイチゴ生産者（以下、A氏）が、私の勤務先である農業試験研究センターへ相談にみえた。A氏によれば、毎年、育苗圃および本圃で萎黄病が多発生して深刻な被害を受けており、健全親株や購入床土の利用、本圃の土壤消毒などの対策を講じてきたものの、効果がなく、このままではイチゴ栽培が継続できないため、効果的な防除対策を指導して欲しいとのことであった。

イチゴ萎黄病は、*Fusarium oxysporum* f.sp. *fragariae* による糸状菌病害であり、イチゴのみを侵す。発病株では初め新葉の一部黄化、奇形を生じ、クラウン部が褐変、腐敗して株全体が萎凋、枯死する（岡本，1970）（図-1、口絵①参照）。親株および苗で多発生すると、苗不足になるだけでなく、感染苗の定植により本圃で立枯れが発生し、減収被害を生じるため、防除上の重要病害となっている。育苗圃での第一次伝染源は、感染した親株や病原菌に汚染された土壤とされ（岡本，1984）、感染親株からはランナーを通じ子苗に伝染（森，1998）するとともに、風雨によって汚染土壤が飛散し拡散する（宮川ら，1979；古田ら，2004）。また、本圃では発病残渣ととも

に残存し土壤伝染を行う（岡本，1977）。

本病による育苗圃での被害は、数年前から他圃場でも問題となっており、新たな伝染源が関与する可能性も考えられたため、効果的な防除対策の確立を目的に調査および試験に取り組むこととした。なお、本稿の詳細については、九州病害虫研究会報第62巻（稲田，2016）にも掲載しているので参考としていただきたい。

## I 育苗圃場での調査

2011年6月24日に、A氏のイチゴ育苗圃（品種‘さがほのか’）において萎黄病の発生状況を調査した。その結果、親株の発病率は32.5%と多発生であり、親株から伸長したランナー先端の子苗にも発病が認められた。これらの親株は、前年に萎黄病の発生がない他圃場で育成されたものであり、ポットの床土は同地区の他の生産者と同じ購入床土を利用していた。また、親株および苗を植え付けるビニルポット（以下、ポット）は一般的なもの、複数年連続して使用するものの、毎年、資材消毒剤であるケミクロンG（カルシウムハイポクロライト、日本曹達株式会社）500倍水溶液への浸漬処理が実施されており、これらが発病に関与する可能性は低いように思われた。ただし、前年に使用され、野外の架台

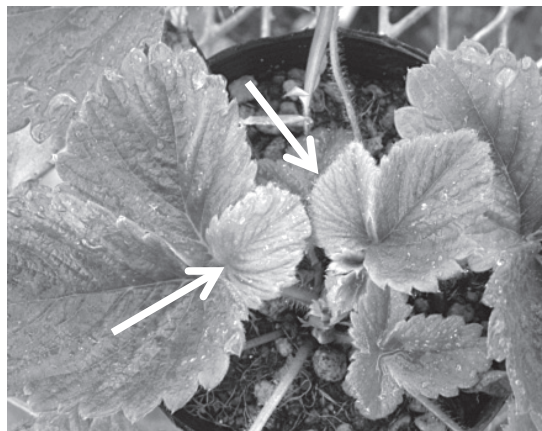


図-1 イチゴ育苗圃におけるポットでの栽培状況（親株および子苗）と萎黄病の病徴

Transmission and Control of Strawberry Fusarium Wilt from Contaminated Pots. By Minoru INADA

（キーワード：イチゴ萎黄病、ポット、伝染源、消毒法）